

B-9

乳臼歯髓室床部の副根管に関する組織学的観察

○張野, 後藤讓治

長大・歯・小児歯

【目的】 臼歯の髓室床部には多くの副根管が存在し、歯髓病変は副根管を介して、根分岐部の歯周組織に波及し、根分岐部病巣を惹起することが指摘されている。我々はヒトの乳臼歯髓室床部における副根管についてSEMによる一連の観察を行い、既に報告した。しかし、ヒト乳臼歯髓室床内部の解剖学的構造、副根管の状況等に関する組織学的研究は少ない。今回はヒト乳臼歯を用い、髓室床部の解剖学的構造及び副根管について組織学的観察を行った。

【材料及び方法】 観察に用いられた試料はインド人小児の乾燥頭蓋骨19顆の下顎骨より得られた乳臼歯76歯である。実験方法は、被検歯を下顎骨から摘出し、脱灰、脱水を行い、ツェロイジンによる包埋後、近遠心的に厚さ25 $\mu$ mの連続切片標本を作製した。ヘマトキシリン・エオジン複合染色を施し、髓室床部の解剖学的構造、副根管の発現状況及び走行形態等を光学顕微鏡下で組織学的観察した。また、コンピューターにより画像処理し、副根管の走行長径及び各部位の内径等を計測した。さらに、加齢に伴う変化を明らかにするため、幼若乳臼歯と成熟乳臼歯の相違について比較検討を行った。

【結果】 1) 成熟乳臼歯の髓室床部における象牙質には2層構造が観察されたが、幼若乳臼歯の場合は2層構造が観察されなかった。2) 乳臼歯の髓室床部における副根管は、全ての被検歯に認められた。副根管は左右対称的に発生する傾向が認められた。3) 副根管の走行形態は様々であった。また、副根管の形態は管状と珊瑚状の2種類が観察された。4) 交通する副根管は成熟乳臼歯より幼若乳臼歯の方が有意に多く認められた。

B-10

外傷歯の実態と処置後の経過について  
—— 永久歯に関して ——

○中尾哲之※, 麻生郁子※※, 赤尾  
静江※, 小川亜希子※, 大社さち※  
※なかお小児歯科  
※※小児歯科アップル

本院では、前回の九州地方会において乳歯の外傷に関する報告を行いました。今回は永久歯に関する実態と処置後の経過について報告したいと思います。対象は、昭和63年1月から平成3年3月までに永久歯外傷の処置を希望して本院を訪れた患児15名(23症例)です。患児のカルテとX線写真をもとに、受傷時年齢、部位、患歯の状態、処置内容、処置後の経過等について調査を行ったので報告を致します。

受傷時年齢は、6～9歳が19症例、10～12歳4症例でした。

性別は、男児8名、女児7名です。

部位は、上顎中切歯18症例、下顎中切歯4症例、上顎側切歯1症例です。

受傷後、来院までの経過日数は、2日以内が21症例、他の2症例は6日でした。来院時の症状は、無症状7症例、動揺1症例、破折10症例、動揺ならびに破折5症例でした。

外傷患児に行った処置は、経過観察7症例、整復固定4症例、歯冠修復8症例、歯髓処置のみ2症例、歯髓処置並びに固定2症例です。

観察期間は、最短2ヵ月、最長4年7ヵ月で、平均2年2ヵ月でした。

経過は、良好が22症例、不良1症例でした。